

幼稚園における健康教育の問題点



上 村 菊 朗

まえがき

「健康で安全な生活ができる」と幼稚園教育要領の第一の目標にかかげられているように、健康教育は今日の幼稚園で最も重要なテーマとなっている。これに応じて、食事や衣服、排泄に関する保健上の躰、園児の健康観察などにも、各幼稚園が大きな力を注いでいる。この結果、地域や、幼稚園によって多少の差はあっても、この教育要領にもられた一応の目標は達成されていると考えてよい。

また、これにとどまらず、保健や、安全教育のために、園内外の設備を積極的に改善、努力している幼稚園も少なくない。

それだけに、あらためて幼稚園の健康教育の問題点を指摘されるところとまどいを感じるが、日頃、小児科医として心に掛っていることを二、三述べてみたいと思う。

健康に対する要求水準

今日、まず考えさせられることは、両親が子どもの健康について

持っている意識である。私たち小児科医の立場でみると、親の健康についての評価の甘さが目立ち、一方では、健康に対する行きすぎに不安もみられる。

知能やおけいこには、驚くほどの高い要求水準を持ちながら、正しい健康観についてはほとんど無関心とさえいえる両親も少なくない。この結果、幼稚園の側も、その考えに影響されているのではないかといった不安も残されている。

正しい健康観とは、一人ひとりの子どもが現在まで病気をしなかったということにとどまらず、今後も病気をはねのけ、社会に適應して行くだけの充分な体力を持つことでなくてはならない。この将来への約束を持ちうるためには、その日暮しの健康ではなく、充分の予備力、余裕を持った健康が要求される。即ち、幼稚園の教師としては、第一にこのような積極的な健康観を持って、幼児の保育に当らなくてはならない。

次に積極的な健康教育を考える際、一般には健康を無関係なものとして見落されがちな異常にも目をむけなくてはならない。即ち、幼稚園教師として、健康について評価の甘い両親に代り、表面からは気づかれにくい異常を発見する責任も進んで引き受けたいものである。斜視や、視力障害、難聴、虫歯、ヘルニア、軽い心疾患など、ともすれば無視されがちなものである。さらに、身体機能のバランスの取れた働きのためには、園児一人ひとりの姿勢にまで気が配らなくてはならない。このようにして、知能にばかりかたまりがちな親の希望に動かされず、健康についてはより一層、その要求水準を高める努力をつづけていきたいと思う。

積極的な健康教育

今日、健康への要求水準を高めた積極的な健康教育の必要なことは既述の通りであるが、その問題点について考えてみたいと思う。

まず、新学期が始まって目につくことは、黄色い安全色の帽子に上着、そして、お母さんに手をつながれて登園する子どもたちの姿である。最近の交通事故の多さを考えると当然の配慮と思われるが、とはいえ、このような保護のみによって、子どもの健康と安全は守られるものではない。むしろ、このような過保護がいつまでもひよわで、また自己に対する親和性を持った子どもの数を多くしているものと思われる。

したがって、積極的な健康教育を考える以上、幼児をまず、この過保護状態から一歩ずつ解放していくことが重要な課題である。こ

のように、いわゆる「育児ママ」「心理ママ」といった母親に育てられ、保護されすぎた幼児は、集団を通してみるとはつきりするはずである。

このような子どもについては、とくに積極的な保健対策が必要である。即ち、幼稚園では、思いきって戸外での運動時間を多くとるように努めると共に、家庭にもよく連絡して、幼稚園での保健についての躰を自主的に実行できるよう指導しなくてはならない。とくに運動に関しては、周囲からの干渉や、禁止をなるべく避け、安全な園庭では自由に振舞えるよう指導していく。さらに、家庭でも、規則的な日課を守り、薄着、乾布摩擦、シャワーなどによる段階的なトレーニングを実施するよう積極的に指導しなくてはならない。

次に、園医や家庭と協力して、幼児の健康状態を充分に把握する必要がある。ただ「欠席が多い」「ひ弱い」といった漠然とした理解では事足りない。積極的な健康教育に必要な過敏性児、一定の健康観察の必要なツベルクリン反応、自然陽転児、あるいは、先天性心疾患、といった分類カードをつくり、各教師が容易にその実態がつかめるように色分けで区別するといった方法を取ってみたいと思う。さらに、普通全身的な健康と切り離して考えられがちな、虫歯、感覚器官の異常、X字脚、O字脚、扁平足、姿勢の異常、ヘルニアといった異常に関心を持ち、対策を講じなければならない。即ち、今日では斜視やヘルニアの手術はできるだけ早期に実施して身体的負担を少しでも早く取り除くことが常識となっているので少なくと

も幼稚園ではこれを見逃し、放置することのないようにしなければならぬ。また、幼児まで扁平足がつづけば矯正靴が必要であるし、悪い姿勢は学校にも連絡して家庭ぐるみで矯正してもらわなくてはならない。このほか、顔色のすぐれない幼児に対しては、医学的な検査によって、真の貧血が見掛けの貧血であるかを區別してもらふよう指導しなくてはならない。即ち、幼稚園においては、ただ病気をしないといったことにとどまらず、従来健康観からは見落されがちな細部にまで健康観察を行なつて戴きたいと思う。

また、事故に対する安全教育についても、いつまでも完全武装で周囲から保護されつづけることは不可能なことを考えて積極的な対策が必要である。常に数年後の状態を予想して、事故を避ける運動神経の訓練も必要である。また、幼児期以後に多い水の事故に対しても、危険な水辺に近よらないだけでなく、水に対する行きすぎた恐怖を持たず、ある程度、泳げるといったトレーニングが必要である。いずれにしても、事故に対しては、一定の条件のもとに、ある程度の危険を体験し、事故に対する耐性を養ふことを常に目標にしたいと思う。

身体的な負担を持つことでの健康教育

次に臨床医の立場からみて、幼稚園教育に望まれることは、身体的な負担を持つ幼児の取り扱ひである。特殊教育を必要とする精神的発達遅滞児、聾啞児、重症の肢体不自由児は別として、先天性心疾患、ひきつけやすいもの（てんかんを含む）、自律神経機能の不安

定、糖尿病といった慢性疾患を持つ幼児の取り扱ひは必ずしも妥当とはいえない。

学校保健統計報告書を見ると、幼稚園児の心臓の疾患の程度は、○・二四％となつてゐる。統計上、出生時の心疾患の頻度は、○・五％は越えてゐるので、乳児期の死亡を考へても、幼稚園児の心疾患頻度はかなり低い。このことは、多くの心疾患児が、幼稚園生活を希望しながらも、入園を許可されずに取り残されてゐることを示唆してゐる。しかし、一口に生れつきの心臓疾患といつても、最も多い、心室中隔欠損、心房中隔欠損を始め、ファローの四徴といったある程度重症の心疾患児の中にも充分幼稚園生活の送れるものも少なくない。したがつて、このような慢性疾患児についても、専門医の診断書を添えて、園児として迎へる積極性がほしいと思ふ。また入園を許された場合にも、体質的に過敏な幼児を含め、身体的な負担を持つ子どもは、必要以上に保護されて、そのためかえつて将来、社会生活への不適応を起している例は決して少なくない。したがつて、心疾患児、けいれんを起しやすい小児、過敏体質児など、それぞれが許される範囲内で正常小児と同じ生活、同じ運動をさせるよう努めなくてはならない。この意味で、慢性疾患については、許される最大限の運動量を専門医とも相談、決定していかなくてはならない。

また、このような身体的に負担を持つ子どもが正常児の中にまじり、特別な差別待遇を受けずにごせることは、本人に取つても、家族に取つても、将来に対して自信を与える重要な要素である。即

ちこれからの幼稚園は、身体的にある程度の負担を持つ子どもにも門戸を開き、常に、個人の最大能力を發揮させることを目標とした健康教育を行なっていくかなくてはならない。

家庭との協力、家庭への働きかけ

最後に、幼稚園の健康教育に関連して問題になるのは、家庭での健康教育への協力である。

第一に、幼稚園で、毎日厳格に行なわれている保健に関する事が、家庭では余り守られていないことである。このためには、幼稚園で必ず守るように指導されていることをはっきり家庭に連絡しておかなくてはならない。

第二に、幼稚園で定期的に行なわれている身体計測や、身体検査の結果に、一層の関心を持ってもらう努力も必要である。折角、ツベルクリン反応を実施しても、その意味が充分理解されていないことも多いので、これを機会に反応とBCG接種の關係について、簡単なパンフレットをつくって説明するといった配慮もほしい。また、今日では、予防接種についても、小児科医は非常に積極的な考えを持っている。即ち、かつては心臓や、腎疾患のある場合、あるいは予防接種で熱のするような過敏体質の子どもの予防接種は差し控えられるが、今日では、このような子どもこそ予防接種が必要と考えられている。このような趨勢もぜひ家庭に連絡しておきたいことである。また、我が国の家庭には、一家揃って健康づくりを考えるとといった要素が非常に少ない。この面での指導も幼稚園の任務の

一つとしてあげてよいものと思われる。この意味で、園児を仲介にして、家庭全体に健康づくりの士気をもりあげたいものである。親子でできる正しい姿勢づくり、簡単な体操、戸外での遊戯などを指導することが大切である。

このように、健康教育の重要性を伝えるためには、できるだけ幼稚園の父兄会、研究会のテーマに健康問題を取りあげて戴きたいと思う。

む す び

以上、幼児の健康教育に関する問題点を思いつくままに取りあげてみた。健康の重要さは分りすぎる位分っているが、これがともすると毎日の生活では第二義的に考えられていることが最大の問題点である。

幼稚園の教育要領にしたがって、常に健康教育を第一に考えるならば、現在の幼児が、どのような脅威にさらされているかが最大の関心事になるはずである。統計的にみれば、かつての感染症に代って今日では事故が幼児を脅やかす最大の要因となっている。これに対して、健康教育も健康ということばにとらわれず、まず、事故に対する対策を考える必要がある。この際、幼児をただ保護するにとどまらず、規律を守り、また事故を機敏に逃げることでできる事故に対する耐性を養って行かなくてはならない。このように、今日の健康教育においては、常に積極的な態度が望まれる。